
Fairy Tale e.p.

藤森優斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Fairy Tale e.p.

【作者名】

藤森優斗

N5750H

【あらすじ】

温かくも脆く、冷たくも優しい詩の中の登場人物。
『White Breath』に続く詩集。

story in the sunflower

金色に広がる世界 「私と貴方の心は重ねて一つ分だ」と
心臓が左に付いた 「私と貴方の身体は一つの様ね」と
抱きしめて 笑った あの頃は…

何処までも広がるような ひまわりの世界
子供の頃 出会った場所だつた

「貴方が鬼ね かくれんぼしようよ」
十数えて振り返り 君を探すよ

ああ そんなの反則だろつて 背の高いひまわりより小さい君は
見つける術もないな 呆れながらも笑う 矛盾の想いは

見つけて逢える事が嬉しかつたんだよ
僕は黄色いこの世界でも 君を見つけられるから
だつて いつも 同じところに居るのだもん
一番背の高い あの ひまわりの後ろに

「見つかっちゃつた」つて笑う君は その幸せを僕にも分けていた
二人で一つ分でしょ? 「私と貴方はいつまでも一緒なんだ」と
君は笑つた

近くに落ちていたカメラ 残り枚数は一枚だ
「ちゃんと撮らないと」 精一杯腕を伸ばして
小さなフレームに 一人分の笑顔を写すよ
大人になつても この想いを忘れないように

ああ 「それじゃあ、私は帰るね」つて 大きく手を振つて走り去

る君に

ずっと手を振っていた 名残惜しくなる 単純な想いは……

その日を境に君に会えなくなつた どうやら心臓は一つになつたようだ

片方だけ生きるなんて そんなの辛すぎるよ 泣が超えた 子供遊びの向い

ひまわりが無くても見えない君の姿 かくれんぼは終わりだよ?
ひまわりのせいにして探してみる 一番背の高いひまわりの後ろ

ああ そんなの反則だろつて 僕はずつと鬼のままになるよ?
君を見つける術はないか? 泣きながらも笑う その写真の中は……

「見つかっちゃつた」つて笑う君は 愛しさも哀しさも教えてくれたね
二人で一つ分でしょ? 写真の中では 今も一人 あの頃の笑顔の
今まで

金色に広がる世界 「君に出会えて良かつた。今も一つ分だ」と
心臓は左に付いた 「僕は大丈夫だよ」 右側に微かに残るぬくもりと

生きていく事にした 笑つた あの頃のよつこ……

キャンディー・ソング

遠い何処かで何をしているかは いつになつても分からぬ
そんなことより あの子が欲しがつた キャンディー探さないと

「さよなら、つて何だか嫌な言葉だね」つて君は苦笑いで言つた
だから君は 每日別れには「またね」つて言つんだね

何億年も前から君に出会つていたのかな

初めて見た時 なんか「これは」つて気がしたよ

大きなキャンディー舐めて 君は笑つて言つた
「明日もまた会おうね」つて言つた

言つたんだ

あの子は何処かで何をしているかは 分からない
走るライト あの子が舐めていた キャンディー 割れちゃつた

何億年も前からもう決まつっていたのかな
身動き出来ない恐怖感 何故か美しくて

大きなキャンディー舐めていた 君は嘘つきだ
「さよならは嫌いだ」つて言つた

言つたのに

君はまだキャンディー探しているのかな
君はまだキャンディー舐めているのかな

「さよならは嫌い」って言つたのに
僕に言わせるなんて 卑怯じやないか
だから その言葉は閉まつて 僕が好きな言葉
「ありがとう」と言つよ

何億年も前から君に出会つていたのかな
違和感のない 何か「いいなあ」って気がしていた
大きなキャンディー舐めていた 君は笑つて逝つた
少なくとも僕が見た君の最後は 綺麗な笑顔だつたんだよ
大きなキャンディー舐めて君は「またね」って言つた
その言葉を信じじるよ 僕は精一杯生きて 君に会いに行くよ
遠い何処かで何をしているかは 死んでみないと分からない
そんなことより あの子が好きだつたキャンディー 探さないと

モグラ

嘘を貰うから 人を信じて
その言葉使って 人を騙した
怯えて潜る 逃げ身の穴は
掘つても 掘つても モグラも無い

金を払うから 獲物逃がして
その獲物捕つて 倍金取つた
恐らく 此処は この身の中に
犯して 犯して 溶け込んだ

何億年も懸けた 命を僕は「要らない」と言う
虚ろな目だから まだ 死んでるか分からぬ

だから 何て言われようと 僕は僕

髪切つて 姿変えようが 一年中 僕は僕
離れ離れ この身と心 逃げる時は一緒
大体 在るべき所は同じ それに嘘はない

傷を庇うから 体丸めて
転がる先では 頭を打つて
だから 何だ? 繰り返す事に
たぶん 意味は無いにしよう

無くさないように 大事に溜めて隠しても
新しい物が何か もう 貰えやしないから
誰が何て言われようと 僕は僕

骨折つて 形失つても それでも 僕は僕
試行錯誤 繰り返しても やはり 何も変わらない
それだし 何が起ころうとして 夜に雨は来ない

この穴掘つて 何が繋がろう 出会い頭の中
この穴掘つて 何を当てよう 一か八かの中

何も見えないが 獲物なら すぐに見つけてやろう
何も見えないが それだからこそ 何が見えよう

たつた一秒だけで 腐る事を恐れてから
たつた一秒に懸けた 命の意味は 計り知れない

散々 挖つて 埋もれそうでも まだまだなんだ
噛み切つて 流れた血なら 生きてる事が すぐ解る

だから 何て言われようと 僕は僕

髪切つて 姿変えようが 一年中 僕は僕
離れ離れ この身と心 逃げる時は一緒

大体 在るべき所は同じ それに嘘はない

人が掘る 穴の中 そこに嘘はない

何処にも 嘘はない

こんな世界なら 嘘はない

マイデン+メルヘン

呼吸を一回行つた その時から歴史が始まつた
嫌になつた数だけ 呼吸を裏切る覚悟をした

心臓が一回動いた その時から歴史が始まつた
錆びてく事を知つて その一瞬の意味を知つた

0に近づいた分 値値は数字に出来ない

でも1から遠ざかつたから 彼は裏切る

マイデン+メルヘン 創られた そんな人生やつていけない
泣きたい時はどう笑えればいい? 心の奥でそつと笑えればいいの?
動かない時計の針 それでも時間は進んでいく 止まらずに

出会いが一つあつた その時から世界が広がつた
見える景色も背が伸びるに連れて広がつた

涙が一つ落つこちた その時から悲しみを知つた
背が伸びるに連れて感じる苦しみは増えていった

細かく刻んだ自分の足跡

その幾つに挫折し手形が付いた?

マイデン+メルヘン 試された 神の悪戯で変わる世界

恨めるのなら誰を恨めばいい? 憎めるなら誰を憎めばいい?
見失つた後ろの足跡 それしか思い出の根拠がない 頼れずに

失くしてしまつた 遠く消えた背中

閉ざしてしまつた 近く開いた扉

その一瞬の時の中で幾つの笑顔と会えた?

マイデン+メルヘン 創られた 自分で作り上げた人生
泣きたい時は泣けばいい 笑いたいなら笑えればいい
動かない時計の針 それが教えてくれた生きる業 忘れずに

マイデン 仕込まれた 寂しいと思う感情を
マイデン 仕込まれた 嬉しいと思う感情を

一人で生きていかないように 時計の針が一本のようにな
一人じや何か出来ないように 分時を刻めないように

一昨日ね お得意の音符を並べて 静かに唄が出来たんだ
寄り添いそう お互いの気持ちを訪ねて 静かに口付けしたんだ
君だつて 昨日は笑う明日に憧れてた
僕だつて 昨日は笑う君を待ち望んでた

いつだつて 傷をつけあつて
いつだつて 血を流しあつた
いつだつて 傷を庇いあつて
いつだつて 血を擦りあつた

お気に入りの ブルース音楽を流して 奇跡に近い感動を知つたんだ
溶け合いそう お前の体温を感じて 奇跡に近い生命を知つたんだ
君だつて 昨日は違う世界に憧れてた
僕だつて 昨日は違う世界を望んでた

血だらけの姿で 僕等は愛を求め合つて
血だらけの姿で 僕等は愛を分かち合つた

何も知らない世界で 嫌々ながらも生きていて
何も知らない世界で 愚痴を吐きながらも生きている

いつだつて 傷をつけあつて
いつだつて 血を流しあつた
いつだつて 傷を庇いあつて
いつだつて 血を擦りあつた

一昨日ね 女の人がビルの屋上から 綺麗に落ちていつたんだ

間に合いそう 狂った姿を見詰め合つて 静かに笑いあつたんだ

君だつて 昨日は死ぬ覚悟で生きていた
僕だつて 昨日は死ぬ覚悟で生きていた

君だつて 昨日は温かいそれを預けていて
僕だつて 昨日は冷たいそれを埋めたんだ

君だつて 昨日は笑う明日に憧れてた
僕だつて 昨日は笑う君を待ち望んでた

いつだつて 変わった世界に憧れてたんだ
いつだつて 違つた世界を望んでたんだ

アナタソナタ

嫌になる訳じやない 世界を恨む訳じやない
ただ 自分が嫌いなだけ それだけの事
聞こえない訳じやない 耳を疑う訳じやない
鼓動がやけに煩いだけ それだけの事

ああ 君が奏でる旋律は心臓のようだ
僕の全細胞に伝わるように 血を流して

「貴方が生きている事で 私が生きていける事です」
天秤が等しく傾いた その答えが全て

くだらなくなつた訳じやない 死にたくなつた訳じやない
ただ 何かが違うなつて それだけの事
無視してた訳じやない 知らなかつた訳じやない
ただ 何かが崩れてるつて そんな気はしてた

ああ なんて素晴らしい景色なのだろう
なんか死んでもいいのかも そんな気もした

「貴方が聴いている事で 私が生きていける事です」
心臓を突き刺した 溢れる血が濃くて

黒くなつた その日々が 赤い 赤い その姿
白くなつた あの日々が 赤い 赤い あの姿
何か嫌なんだつて 何か違つてんだつて
そんな気がして いた 分かつてたんだ

崩れていく世界が 狂つていく世界が
訪れてしまう 世界の果てに

ああ 血が足りない 酸素が足りない 死にそう
ああ 血管を震わす振動が生きている事だ

僕が生きている事で 私も生きている事だつて
天秤が傾いた その正確性が世界だ

私が鳴らす音で 貴方が聞き取る事で
血は流れいく 赤色を濃くもつて

何か違つてた 何か変わつてた
でも 別にいいやつて
何か違つてた 何か変わつてた
でも 別にいいやつて

それでもいいやつて
気にしていいって

終わりの果てに

誰もが全部 くだらないと思っていた
良い奴なんて 一人もいないだろうつて
吐き気が迫る 真っ暗な朝の中
何か違うかなって 生きにくいかなって

何もかもが もう終わっていく
跡形も無く 全て 消えてしまう
白い夜の中 手首を切つて待つ
彼女が何処か 綺麗に見えた

不思議と上手くいっている 間違いじゃないはず
それでも 何か違う気はした 違和感があつた
夜は暗い気はしない 朝は何故か暗かった
死ぬのかなって考えて寝て やっぱり 起きたんだ

何だかんだ もう終わってもいい
後戻りの出来ない なら いらない
モノが多すぎるだろ そして裂く
彼女は笑った 血を流して

ああ みんな 頭イっつちまつて 狂つて
彼女はいつも言っていた 「私はこの世界にいらないの」
ああ みんな 頭イっつちまつて 狂つて
彼女はいつも言っていた 「私が生きてると迷惑でしょ?」

触つて嫌がるな お互汚れた両手だろ?
あの子だつて汚い それでも綺麗に見えるんだ

触つて嫌がるな お互い汚れた両手だろ?
あの子だって汚い だけど好きになつたんだ

“どうやら世界は終わるらしい その後はどうするのだ？
何も残らないわけがない 一体 何が残るのだ？
世界が終わる その前に 彼女は自ら逝つたんだ
赤く染まる姿を見て 綺麗だと思つたんだ

死んだ彼女の姿を見て 生きていくと思つたんだ
忌んだ彼女の姿を見て 終わらないかもつて思つたんだ

Under Line

今日のような日 笑う事も忘れそう
大切な物を失くしたの？ 最初から無いくせに
今日のような日 言葉すらも忘れそう
大した期待は受け入れない 答えられやしないから

一体 何をすればいい？

心などとっくに粉々になつて

今更 何と言えばいい？ 綺麗に死んだ感情の果てで

笑いながらも 一人で生きてきたのは 嘘じゃないさ
殺しながらも 一人を守つてきたのは 嘘じゃないさ

滅びた精神 誰かが今頃死んでも

一つも俺には関係ない 迷惑もかからないだろう

滅びた精神 俺がその内死んでも

一つも世界に関係ない 気にする人もいないでしょ？

一体 何を捨てればいい？

持ち物の無い手駒の中で

尚更 何か捨てればいい

綺麗に投げる その身の価値を

腐りながらも 一人で生きてきたのは 嘘じゃないさ
壊れながらも 一人を使ってきたのは 嘘じゃないさ

何に線を引けばいい？

大事な所にアンダーライン

何に線を引けばいい?

大事な所にアンダーライン

すごいよね 手首を切つて 笑顔の彼女

すごいよね 手首を切つて 綺麗な彼女

笑いながらも 一人で生きてきたのは 嘘じゃないさ
殺しながらも 一人を守つてきたのは 嘘じゃないさ

死にたいね 死んでみたいね

皆 そう思つてんだ 誰だつて思つてんだ
死にたいね 死んでみたいね

皆 そう思つてんだ 誰だつて思つてんだ

結局ね 全部に引いた 失つて 悲しくなつて
結局ね 全部に引いた 失つて 寂しくなつて

DEATH MEET YOU

手を挙げなよ もう 君の番だよ
逃げたつて無駄だから 居場所はすぐ分かる
頭下げなよ ほら バレたんだよ
隠れ家なんて いつもそこ 少し学習しなよ

遠退いた分 減らす何かがある
増やす事も容易じやないさ

お手上げだろ 田隠し辞めなよ ちゃんと前を見てみりよ

迎えに来たよ あ いつちおこで
パレードに参加しそう

吐き氣するだろ? まだ 君の番だよ
死ぬ暇なんてないくらい 忙しければいいのに
嫌気さしたろ? もう 飽きたつて
綺麗に生きる術なんて 持ち合わせてないのに

変わらない日常の中で 変わっていく精神だけが
叫んでんだろ 悲鳴を上げて 心臓よりデカイ音で

迎えに来たよ あ いつちおいで
バレてるけど 無効に死

生きているのは間違いじやない 彼女は呼吸を繰り返して
死んでみたいのは嘘じやない 彼女は呼吸を裏切つて

腐りそろ アンタの賞味期限は過ぎてるだろ?

だけど まだなんだ 消費期限はまだ来てない
苦しそう アンタは人口呼吸ばかりなんだよ
だから 気も失つて 生きてる事を知つてんだろ

汚れた手で綺麗に触つて 汚れた彼女と綺麗に死んで
何もかも この命が この心臓が 血を流して
デカイ音で叫んでるから

迎えに来たよ さあ こつちおいで
まだ 溫かい体温が

迎えに来たよ さあ こつちおいで
中途半端に見える明日が

迎えに来たよ さあ こつちおいで
無視して 裏切られた日には

迎えに来たよ さあ こつちおいで
パレードに参加しよう

何も無い部屋が寂しく感じなくなつた
助けの手なんて 握らないんだと
とても緩やかに だいぶ、ゆっくりと
だけど 確実に崩れているんだって

全てが終わるのは もう明日なんだって
考える暇も無く 彼女は綺麗に笑う
大事なCDを持つて 思い出のアルバムを持つて
逃げても無駄だが 彼女は綺麗に走る

気持ち悪くなるくらいに幸せだったかも
不幸中なんだし 幸いなんて見つけられない
今日もはつきりと 昨日もしつかりと
犠牲を出して 回ってる世界だから

全てが終わるのは もう明日なんだって
欠伸をしながら 彼女は可愛く笑う
手首を切り裂いた後 首を絞めた後
血を流しながら 彼女は可愛く歌う

何かが違つていく事を肌で感じていた
取り返しのつかない 生活を繰り返して
何処か違和感を経て 何時か劣等感を出て
そして 何もかも腐り果てるのだろう

全てが終わるのは もう明日なんだって
脚を繩りながら 彼女は美しく死ぬ

ガムを食べながら アメを舐めながら
思い返しては 彼女は美しく死ぬ

誰も悪くない だけど狂っていく 救いようの無い世界が終わる
何も出来てない だから生まれていく 救われようも無い存在だか
らこそ

全てが終わるのは もう明日なんだって
考える暇も無く 彼女は綺麗に笑う
大事なCDを持つて 思い出のアルバムを持つて
逃げても無駄だが 彼女は綺麗に走る

全てが終わるのは もう明日なんだって
一息ついては 彼女は綺麗に笑う
好きな唄を唄つて 思い出の唄を唄つて
世界が消える時 彼女は綺麗に笑う

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5750h/>

Fairy Tale e.p.

2010年10月28日03時13分発行